

令和6年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
54	川崎市立 橋小学校	中尾 由美子

学校教育目標	今年度の重点目標
<p>子ども一人一人を大切にしたい豊かな人間性をはぐくむ教育 (めざす子ども像)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・考えを深める子 ・自分も相手も大切にしたい子 ・粘り強く取り組む子 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が確かな学力をつけ学ぶことが好きになる学校づくり (学習指導要領に準拠した教育活動の推進) ・子どもの思いが生き一人一人が輝く学校づくり (自己肯定感、自己有用感の育成) ・健全な心と健康的な体を育てる学校づくり (人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深める学校行事の充実を図る) ・地域にねざし地域と共に歩む学校づくり (地域と共に歩む学校づくり)

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1 学習指導要領に準拠した教育活動 ・教育課程 ・確かな学力の形成	<p>学習指導要領に準拠した教育活動を推進し、授業のねらいや内容の明示とICTを活用した学習活動を工夫・改善する。(分かる授業への授業改善)</p> <p>6学年間を見通した教科横断的なカリキュラム編成および評価の見直し</p> <p>基礎基本となる学力の定着を図り、伝え合い、学び合う楽しさ、喜びを実感できる授業をつくるために、校内研究を軸にお互いの授業を見合う授業参観を奨励する。</p> <p>学年内で児童理解や授業改善のために、教科担任制や学年内での交換授業を取り入れるようにする。</p>	<p>校内授業研究に限らず学年を越えてお互いの授業を普段から見合うことで、教師自身が行う自分の授業をイメージしたり改善したりすることができるようになった。課題は、時間を作り出すゆとりがない教師もいることである。</p> <p>学年内で教科担任制や交換授業を実施し、児童や評価について共通理解を図ることができていた。特に低学年では、朝や帰りの会、道徳、清掃時間などを中心に担任が他クラスを指導する時間を取り入れることで他クラスの雰囲気を感じとり、自分のクラスを振り返ることにもつながっていた。</p>	<p>日頃から学級経営の充実を図ることや、教師自身が観て学ぼうとする意欲をもてるように、前年度から継続している短時間、いつでも「ふらっと参観」を次年度以降も継続し、お互いが切磋琢磨して学び続ける姿を求められるような雰囲気や醸成していく。教科担任制を推進し、学年内での交換授業を取り入れることを継続して進めていくようにする。学年の実態に合わせて、通年または、一部の単元だけ取り入れるなど時間割等を工夫しながら取り組んでいく。また、モジュールを効果的に活用したカリキュラム編成を見直し、基礎基本の学力の定着を図るようにする。</p>
2 支援教育の充実	<p>適応支援室(通称たちべえルーム)との連携と個別の支援計画による不応や不登校児童へのきめ細やかな指導の充実</p> <p>一人一人の児童を大切にしたい指導・支援の充実を図るために、支援教育Coを中心とした支援体制を整える。</p>	<p>支援教育Coを中心として、支援体制が確立しつつあることが大きな成果である。</p> <p>定期的に巡回訪問を取り入れることで支援が必要な児童が明瞭になり、教職員間で情報共有と支援の手だてについて具体化できた。</p> <p>必要な支援を少しずつ保護者にも理解してもらいながら関係機関との連携もできるようになってきている。課題は丁寧に見取るが故の浮き彫りになる支援が必要な児童の増加に対しての人的環境への対応である。</p>	<p>特別支援教育・学校教育サポーターのさらなる充実を図り、きめ細やかな支援体制を継続していく。できる範囲の支援体制は作っているが、教員の人数不足により、対応に限界がある。</p> <p>担任と一緒にできる支援の提供と低学年の担任の協力も視野に入れていく方向を考えたい。</p> <p>保護者の理解を深められるよう、担任やCo、管理職等と一緒に入りながら複数での対応を心がけ、共通理解を図りながら、個に応じた支援体制の在り方を常に見直していくようにする。</p>
3 豊かな体験活動	<p>豊かな体験活動の充実を図るために、栽培活動や自然体験の充実、学校司書との連携、音楽集会などの活動を取り入れる。</p> <p>総合的な学習の時間では、高学年ではクラス総合、中学年では学年で扱う材は共通でもクラスごとに取り組み方が違うことで主体的な取組から自己実現ができるようにする。</p>	<p>生活科・総合的な学習の時間の充実を図ることや、キャリア在り方生き方教育の推進を図ることができると考えている。(自己の生き方を考えていくための資質・能力を育む)</p> <p>子どもたちの想いを生かし、主体的な取組と達成感につながる活動であったと振り返っている。教師が見通しをもちながら、学年、学級それぞれの材を大事にし、各行事等も見通した活動にしていきたい。</p> <p>キャリアノートの活用もスタート時に共通理解をし、各学年の足並みを学校としてそろえていくようにする。かわさきGIGAスクール構想への取組のために職員研修当も引き続き取り入れ、授業の中で教職員も児童も抵抗なく活用できるようにしていきたい。</p>	<p>共生*共育プログラムの実施を継続すると共に、効果測定についての結果も同様に活用していく。職員研修として効果測定の見取り方を定期的に行うようにしたい。また、自己肯定感が高いものの自分のよいところにも気づくことができるような取組を強化していきたい。</p> <p>年間を見通したキャリアノートの活用が学年によって、うまく機能していないことが課題である。キャリアパスポートへの対応や効果的な活用方法を再確認し、次学年につなげていく必要がある。</p>

4	安全管理	学校安全体制の強化を図るために、防災訓練、下校訓練、防犯教育の充実を図る。定期的な施設設備の点検及び機能的な授業環境整備を行う。	防犯訓練に関して、今まで通りの訓練のやり方ではなく、新たな方法を取り入れ不審者の侵入時の訓練が児童、職員共に実施することができた。密にならず児童が体を隠す方法をさらに探っていく。	年間を通して様々な事態を想定し、形式的な訓練にならないようにその都度見直し、全教職員で共通理解を図る。また、警察と連携するなど専門家による不審者対応等の研修を計画的に取り入れ実践を積み、学校安全体制を強化していく。
5	保健管理	食育教育や保健教育を充実させ、児童自らが健康、体力向上を目指す。	きらきらタイムは昨年よりも多くの時間をとり、可能な限り、朝の活動時間をとるようにした。栄養教諭や養護教諭による食や保健に関する学級指導は、特に低学年には有効で、食育や健康管理の大切さが分かり、意識が高まるものとなった。	かぜ、インフルエンザ等による感染予防(手洗い、うがい、換気など)を励行し、体力向上、運動に親しむ環境づくりを心がけていくようにする。また、学級指導の年間計画をもとに食育教育や保健教育のさらなる充実を図るようにする。
6	保護者、地域との連携 地域の教育力を生かした学習の実践	地域と共に歩む学校づくりを目指して、地域の自然や人材力を活用する。学校運営協議会、学校だより、学年だより等を生かし、課題や成果を明確にしなが情報発信や家庭・地域との連携を図る。	地域の方との交流は実施方法を工夫し、昨年度以上に実施できたものが増えた。 家庭への情報発信として学校・学年だよりやHP、PTAだより等を活用しながら学校の状況を伝えることができた。 授業参観や懇談会等年間を通して保護者が学校に来る機会が増え、児童の成果物などを見てもらう機会が増えた。 見通しをもち計画的に地域と連携した学習を実践していくことは課題である。	地域の豊かな自然環境や文化財、人材を大切に、活用しながら、できる限りの連携を図っていく。家庭への発信として、HPは今年度以上の頻度で更新していき、児童の声も反映できるようにする。学校・学年だより、必要に応じてメール配信などを活用し、必要と思われる情報を迅速かつ的確に伝えていくようにする。また、ペーパーレスにより仕事の効率化を図ると共に、資源削減および環境配慮に努める。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<p>2月4日の学校運営協議会において、今年度の教育活動や学校評価の結果と考察、PTA活動等の報告から様々なご意見をいただいた。教職員が児童や保護者と共に、授業や行事に取り組んでいること、特に地域と一緒に取り組む行事が昨年以上に実施できたことは行事が精選され、地域とのつながりが希薄化される現在、貴重な時間である。地域交通安全員や巡回カウンセラーとの連携などの取組や生活科・総合的な学習の時間等の教育活動の中に地域の人材を大切にしている点は大事にしてほしい。保護者ボランティアやPTA図書ボランティア「ブックママ」の読み聞かせなどを大切にしたい。次年度は学校運営協議会で今年度見えた課題をさらに整理し、学校と地域が協力してできることを一緒に考え、学校へ積極的に関わっていきたい。</p>	<p>学校教育目標の実現に向けて、より分かりやすい、親しみやすいグランドデザインを改善していくようにし、全教職員が同じ方向で教育課程に取り組むようにする。家庭環境を取り巻く支援を必要とする児童の割合が増え、学校および時間外での対応が増えているのも事実である。学校で対応できることには限界があるが、児童が学校は楽しいと思える環境を整えていく。 学校教育目標を基にした教育活動については、全教職員に浸透するよう部会の担当者たちが様々な工夫を試み共通理解をより図ることができた。次年度は、よりきめ細やかな支援を意識しながらCoを中心とした支援体制を新年度始めに共通理解することからスタートし、一層充実した支援体制を模索していく。また、教職員の異動等を見据えながら、ミドルリーダーの育成と共に組織としての体制を新たに固め、人材育成にも努めていく必要があると考える。</p>